

# 環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	12
瑪瑙集	25
紅玉集	27
7月号月評	28
惠贈句集拝見	30
惠贈俳誌拝見	32
特別作品「沖縄旅情」	34
琥珀集作品鑑賞	36
瑠璃集作品鑑賞 I	37
II	38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	39
俳誌交歓	41
他誌転載	42
妣の国父の蒼天 (16)	44
大原寂光院吟行記	46

今月の一句

羽抜鶏追はれて墓も笑ふべし 桂 樟蹊子

(昭和三十四年作)

奥嵯峨の化野念仏寺を訪ねられたときの作品である。沢山の石仏や墓の中を追われる羽抜鶏と、追いかける住職との光景を目にされた師は腹を抱えて笑われたそうである。よほど可笑しかったのであろう。

「墓も笑ふべし」と言う下五の措辞が羽抜鶏の滑稽さも見え、楽しい句に仕上がっている。

隆子

# カーネーション

塩路隆子

恐竜の裔の裔なり蜥蜴の子  
山蟻の隊列続く古戦場  
峡の田の天地混迷蝌蚪の国  
悪声の雉子躲はしけり猫車  
早苗餐や児の食欲の侮れず  
鹿尾菜煮る骨ほねを掴めず七十路かな  
母として詫びたきもありカーネーション

# 七月号光耀抄

塩路 隆子選

花菖蒲活けて背負はす一升餅  
リラ冷や振子時計のレトロな間  
ぶらんこの声太陽の上にある  
仰山の願ひ浴びたる甘茶仏  
母の日に蘭草の草履備前より  
梅干して安堵を壺に収めけり  
四月馬鹿米寿翁の恋ざんげ  
殺生も時によりけりごきかぶり  
旅終り食べたきものに初鯉  
大蕘直滑降のつばくらめ  
靄上がり墨絵世界に花の色  
さみどりの和布蕪とろろや島料理  
行春や暗き厩のがらんどろ  
春風にちひろの少女駈けて来る

山口キミコ  
小澤 菜美  
鈴木 照子  
宮田 香  
増田 一代  
岡 佳代子  
北尾 章郎  
森下 康子  
竹内 悦子  
坂上 香菜  
坂根 宏子  
田下 宮子  
前川ユキ子  
松岡 和子

玻璃越しの鮫の一瞥夏帽子  
 一族に男の子五人や柏餅  
 初夏や草食男子急増し  
 大銀杏豆つぶ程の新芽かな  
 ベッドより薫風に乗る鳥の影  
 籐椅子や今なほ亡父の指定席  
 草笛の呼ぶ郷愁の風に逢ふ  
 窓千に千の生活や風光り  
 花冷の喪服の列に加はりぬ  
 風薫る今もジントの千鳥足  
 鉄砲の里の家並や風光り  
 求婚は權を休めむ春の湖  
 遠山の春動きけり鳶の笛  
 四方の山空に溶けゆくおぼろかな  
 毛虫とて神の与へし生命持ち  
 「坊ちゃん」の頃懐かしや新教師  
 奏で舞ふ雲中菩薩藤の頃  
 春闌けし雑木山より鳥語降る  
 美しき人の会釈や春日傘  
 ゆくりなき蛇の奇襲や古墳道

藤見佳楠子  
 中川すみ子  
 笠井清佑  
 桂敦子  
 小林成子  
 石川かおり  
 塩路五郎  
 大島みよし  
 和田森早苗  
 宮崎左智子  
 井口淳子  
 阪本哲弘  
 青山正英  
 伊藤憲子  
 安本恵子  
 和田郁子  
 田中浅子  
 杉本綾  
 三川美代子  
 片岡久美子

「それいゆ」の表紙のやうな初夏の服

樽出しの京漬物屋青葉風

蒲公英の黄金色の首飾り

拝観のバスを匿ふ宮若葉

街道の子つばめ仰ぐ旅の人

桐の花テニスラリーの音響き

吊橋の千歩の揺れや淫霞

端麗に座します塔や新樹光

長閑なり甘えも犬の処世術

賑やかに疏水往来花の客

風まとふ甘味処の麻のれん

サボテンや弁慶仁王立ちて死す

赤門を燕と共に潜りけり

花見客殿の気分を満喫し

最果ての下北遅き桜かな

若葉風孔雀が羽根を広げたる

豆の花フレッシュマンのメモ増ゆる

との曇る大原の里遅桜

民宿のごとく厨房子供の日

風入れや国宝仏画勢揃ひ

小西 和子

松田 和子

田所 昌代

秦 和子

福本スミ子

長濱 順子

中本 吉信

新実 貞子

能勢 栄子

竹内喜代子

辻 知代子

常田 創

土井くみ子

富田ヒナ江

鷺見たえ子

紀川 和子

川崎 利子

小林 久子

粟倉 昌子

飯田美千子

おぼる夜や暖簾かざせる京ことば  
 桜吹雪朱のひざかけの舞妓さん  
 ひと言を呑み込込む間合ひ花吹雪  
 針箱に色糸束ね四月尽  
 花冷や人恋しげに緋毛氈  
 花みくじ引けば「満開」春日和  
 薄紅の衣を纏ひたる夕桜  
 春深きロダン像めく夜汽車人  
 老漁夫の投網一閃初夏の湖  
 庭石を一足跳びの夕立かな  
 柳影橋の袂のそば処  
 薫風に幟はためく相撲部屋  
 筍を煮て厨房の風清し  
 穢れなき白木蓮や空高き  
 みをゆらしペンペンぐさのすずがなる  
 むらさきのふじのカーテンくぐりたい  
 さわつたらおたまじゃくしはニユルニユルだ  
 かみの毛をあみこみしたらすずしいな  
 足先でかきわけ入る菖蒲の湯  
 五月晴れ海にダイヤをばらまいた

五十嵐 勉  
 池田加寿子  
 稲田 和子  
 伊東 和子  
 宇治 重郎  
 宇治原 幸  
 山本 節子  
 山本 孝夫  
 山本 丈夫  
 吉田 希望  
 吉田 晴子  
 木戸 宏子  
 中井 登喜子  
 伊藤 久江  
 森下 千聖  
 廣瀬 まさや  
 土井 ほか  
 塩路 彩奈  
 高野 綸  
 廣瀬 結麻

# 琥珀集

レトロな間

小澤 菜美

天上の父母如何に花の夜

灰ぼのと木曾路煙らせ余花の雨

漣の光となりぬ残り鴨

むらさきの漣空に花檣

たんぽぽの絮の旅立ち大志持ち

山藤や直哉旧居を訪ねつつ

リラ冷や振子時計のレトロな間

武具飾り

山口キミコ

ぶらんこの声

鈴木 照子

武具飾り男三代正座かな

粽結ぶ母の手元を真似てみる

花菖蒲活けて背負はず一升餅

初節句泣いて笑って主人公

先づ父母の墓前へ供へ新茶かな

頃合ひの湯を注ぎたる新茶の香

桜蕊色に染まりし舗道かな

反転し目覚めたる子や新樹光

遊園の「急流すべり」夏来る

ぶらんこの声太陽の上にある

藤の風夢の世界へハンモック

囀れり飯盒の米炊き上がる

紙皿を攫ふ薫風バーベキュー

入院の子が振る小さき鯉幟

あをによし

宮田 香

夕桜

岡 佳代子

斑鳩の小川いづれも花筏

滲みつつ田水に写る臙月

佐保姫の送りし風やあをによし

花林檎撓りて子規の句碑飾る

西塔の水煙に鎌春嵐

仰山ぎょうざんの願ひ浴びたる甘茶仏

復元の大極殿や揚雲雀

母の日

増田 一代

恋ざんげ

北尾 章郎

春蟬を遠く近くに山路越

整ひし水田や早苗出番待つ

薫風や人それぞれの手弁当

碌山の庭にひっそり母子草

山つつじ燃えてゐるなり自己主張

母の日に蘭草の草履備前より

五月晴蛇の目傘さし白牡丹

夕桜少し恋めく待ち合はせ

隠しごと出来ぬ性なり茄子の花

梅干して安堵を壺に収めけり

傷つくも癒やすも言葉花毒

天上の母へ届けよ花吹雪

落雷を近くに犬の落ちつかず

春燈下下五の措辞に執心し

独り行くをんな遍路の笠目深

胸を打つポップス流れ卒業歌

四月馬鹿米寿翁の恋ざんげ

風倒にひこばえ確と老銀杏(鎌倉宮)

変らぬは郷の山の端月おぼろ

花吹雪ビニール傘に重みかな

カーリングめく廊下拭き風薫る

ハンバーガー

森下 康子

箸置の鯨大口冷奴

蝶翔る駆け込み寺の閑けさに（鎌倉東慶寺）

江の電の揺れにまかせて春の旅

殺生も時によりけりごきかぶり

ハンバーガーほうばりほうばり薬の日（五月五日）

七曜を長しと思ふ春愁

粽解く潔く美しくを心条に

初鯉

竹内 悦子

春浅し北京如何にと旅支度

帰国せし主に開けりアマリリス

子供の日北京土産の布パンダ

新茶汲み旅の夜話果のなく

旅終り食べたきものに初鯉

愛鳥日旅の留守護る庭の草

旅終へてやはり近江よ初夏の湖

一品一村

坂上 香菜

大豊直滑降のつばくらめ

奥八女に樹令六百藤まつり（国指定天然記念物）

天領水も日田の特産桐の花

茶畑の峽に廻れる水車かな

青梅や一品一村発祥地（大分県）

若葉風筑紫次郎のかがやけり（築後川）

百選の棚田の畦の躑躅かな

吉野山

坂根 宏子

花の雲の占める一峪吉野山

霧上がり墨絵世界に花の色

吉野山花も御堂も絵巻物

花冷にぬくもる茶店吉野葛

子規館を訪うて札所へ遅桜

遍路行く田植の済みし畦の道

黄昏に花を巡りて花由来

薫風

田下 宮子

花吹雪

松岡 和子

雉子啼くや安達ヶ原に鬼女の塚

鬼女岩屋守る薄暑の黒き猫

安達太郎山のフルーツライン林檎咲き

薫風の陸奥に銘酒の「花霞」(智恵子生家)

鳥引くや生家に古りし酒林(智恵子生家)

聖五月丘のチャペルの祝婚歌

さみどりの和布蕪とろろや島料理

暗き厩

前川ユキ子

奈良団扇

藤見佳楠子

一病へ友の温もり新茶汲む

春惜しみ城内渡る午鐘かな

緑さす濠を巡りて屋形舟

行春や暗き厩のがらんどう

多国籍人の賑はひ花の城

薄暑なり天守へ続く急梯子

薫風に望む城下や深呼吸

日曜は日曜らしく五月鯉

花吹雪まぶた閉ぢても花吹雪

春風にちひろの少女駆けて来る

獅子降りし文珠菩薩や花の冷(修理中)

浮世絵のをんなの語る春の宵

水底のことは知らずに花筏

空覆ふコヒカン桜古城なる

山麓ことに明るき椎若葉

しゃぼん玉幸せ色にふうはりと

ひとり居の手持無沙汰や奈良団扇

桐下駄に残る指あと宵祭

玻璃越しの鮫の一瞥夏帽子(海遊館三句)

餌を欲るラッコ背泳ぎ髭光る

赤海月触手廃かせ自在泳

柏餅

中川すみ子

若葉萌え

桂

敦子

ケールを遠目に余花の鞍馬徑  
たまさかの故郷くにの便りや躑躅咲き  
嬰兒に向う鉢巻夏祭

一族に男の子五人や柏餅

古き店に古りし大皿鮎を買ふ  
カーネーション一本添へて仏花  
五月雨や百歩の店で買ふ昼餉

大極殿

笠井 清佑

鳥の影

小林 成子

好きな児も嫌う児もをり筍飯  
飛火野の山藤見頃誘はるる  
葛城の古道の棚田水張る  
初夏や草食男子急増し  
にはか雨遠足の児等固まりて  
青葉風大極殿へ人の列  
百号の画布や山藤溢れぬて

花冷の身体ほぐせりストレッツ  
花筏に合はせし歩幅川に添ひ  
春寒しゆとり教育見直され  
若葉萌え風格いよよ飛雲閣  
大銀杏豆つぶ程の新芽かな  
バス待ちの眼を楽しませ白すみれ  
筍の歯ざわり感やわかめ和

入院を延ばし延ばすや四月馬鹿  
入院を決めかねてをり聖五月  
オペを待つベッド固しや五月闇  
手術了へ子等と握手やみどりさし  
リハビリに長き廊あり新樹光  
ベッドより薫風に乗る鳥の影  
夏灯し真夜のナースにはげまされ

籐椅子

石川かおり

春惜しむ

大島みよし

葉桜や診察室の夫を待つ

シート干す傍に咲く利休梅

ビロードのドレスまどひて紅い薔薇

走り茶を味はふ店のまねき猫

誕生のメール届けり桐の花

籐椅子や今なほ亡父の指定席

籐椅子を取りあひしたる遠き日々

蚕豆

塩路

五郎

夕牡丹

和田森早苗

草笛の呼ぶ郷愁の風に逢ふ

真紅なほ余生自負せる落椿

蚕豆の塩味よろし下戸好み

サングラス海遊館に鮫の笑み

夏燕低き城下の軒掠め

雨を呼ぶ鳴きゐて見えぬ青蛙

復元の大極殿や風光り

窓千に千の生活や風光り

往路見て復路は触れぬ雪柳

過ぎゆきし日々への追慕花散りて

一瞬の風と戯れ雪柳

風の意にひと日順ひ雪柳

老幹の力の限り春惜しむ

筋肉の緩む実感若葉冷

餌をねだる鹿の鼻先春深し（宮島にて）

石楠花の群れて日蔭の行者みち

花冷の喪服の列に加はりぬ

行春や弓道愛す父逝きて

葩を重くする雨夕牡丹

背すつと伸すも科や更衣

灰汁ぬきが決め手たかな料理かな

# 瑠璃集

ジンタ

宮崎左智子

一山を洗ひ流して五月雨  
モナリザに見つめられをり目借時  
阿修羅とも弥陀ともならず春送る  
風薫る今もジンタの千鳥足  
昭和の日国旗揚げし一軒家

鉄砲の里

井口 淳子

鉄砲の里の家並や風光り  
燕来る鉄砲鍛冶の屋敷跡  
発明家の屋敷跡なりみどり立ち（一貫齋）  
文豪の詩碑あるほとり錦鯉（司馬遼太郎）  
戦国の浅井口マンや新みどり

街 隴

阪本 哲弘

空酒を桜大樹と分かち合ふ  
花疲花のことにはもう触れず  
十年後の再会約し苗木植う  
求婚は懼を休めむ春の湖  
街隴昔の吾と擦れ違ふ

老 鶯

田中 芳夫

遊船に躓きくる水尾と鷗たち  
鷗にも塩味薄き餌を与ふ  
水舁きて汗を厭はず千枚田  
老鶯や伊根の棚田を一望に  
はからずも新茶を賜ふバス吟旅

鳶の笛

青山 正英

遠山の春動きけり鳶の笛  
湖面より風逆巻けり鳶若葉  
山桜散りゆく難の深さかな  
春光をあまねく浴びて吾が書齋  
里山は穀雨に煙る朝日かな

## 七月号月評

塩路 隆子

今月はアトランダムに各集から選んだ句を月評してみたい。

### 花菖蒲活けて背負はず一升餅 山口キミコ

去年、宇治吟行の計画をして下さった作者だが、吟行当日に予定よりも十日も早く生まれた赤ん坊がもう一年も経たれたのかと驚くばかりである。古くから、一年のお誕生日に一升の餅を子供に背負わせて、歩けば拍手喝采、歩けなくても子供が無事を祈るといふ風習があつたようである。九州ご出身の山口家では今も大切にこの風習を守られている。同時に「武器飾り男三代正座かな」の句も発表されているが、その光景が目に浮かぶようである。この坊やの成長の過程の一駒として大切にしたい句である。

### リラ冷や振り子時計のレトロな間 小澤 菜美

作者が古いご生家を思い出しておられるのか、たま訪れた所にそれがあつたのかは判らないが、電子時計の世に振り子時計の音は懐かしい。「リラ冷や」とあるから洋風な感じのする「レトロ」な間であろう

か。洒落た句に仕上がっている。

### ぶらんこの声太陽の上にある 鈴木 照子

なんとと言っても「太陽の上にある」の措辞に惹かれる。ぶらんこに興じる子供の生き生きとした動き、声の弾みなど、毎日預かっておられるお孫さんを詠まれるのを得意とされる作者であるが、この句も大きな収穫の句である。一読明快、しかも省略の効いた良い句である。

### 仰山の願ひ浴びたる甘茶仏 宮田 香

四月八日の灌仏会には、花御堂につくられた可愛い誕生仏に竹の柄杓で甘茶の湯を漉ぎかけるのは、お釈迦さまの誕生のとき、甘露の雨を降らせて太子を湯あみさせたと言う伝説をなぞられたものである。お念仏を唱える人もあるだろうが、作者は御願いを沢山している人に出会って驚いたようす。「仰山」と言う言葉は俳句では余りみかけないが、この場合驚きの効果を表わしている。甘茶をかける度にお願いをされたのはお釈迦さまも大変！であろう。作者の声が聞こえて来そうである。

(以下略)